

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

静岡県焼津市

○学校名

焼津市立大井川西小学校

○学校のURL

<http://www.ooigawanishi-e-s.ed.jp/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】1～5年各2学級、6年3学級、【特別支援学級】1学級、
【合計】14学級

○児童生徒数

【全児童数】401人（平成27年12月1日現在）
（内訳：1年生45人、2年生70人、3年生69人、4年生68人、5年生72人、6年生77人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成26、27年度静岡県教育委員会人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
自分らしさが輝く子
【人権教育に関する目標】
（重点目標）『自分から』がいっぱい、『思いやり』『支え合い』がいっぱい

○人権教育に係る取組一口メモ

今ある教育活動を「人権教育」をキーワードに見直し、捉え直し、ちょっとした工夫をプラス

○人権教育にかかる取組の全体概要

- (1) 学習指導部「学ぶ楽しさを実感し、確かな学力をつけることにより、子供の自尊感情を育てる」
 - ① 人権教育を意識した授業づくり
 - ② 学習の土台づくり
 - ③ 道徳、学級活動、総合的な学習の時間を通した人権感覚の育成
- (2) 生徒指導部「自己指導能力を高めることにより、子供の自尊感情を育て、お互いを思いやる行動ができるようにする」
 - ① 自己指導能力の育成

- ② 自己肯定感・自己有用感・自己存在感の形成
- ③ 特別支援学級とのかかわりによる人権感覚の育成（インクルーシブ教育）
- (3) 特別活動指導部「集団の一員として、自分からよりよい人間関係を築こうとする自主的・実践的な態度を育てる」
 - ① よりよい生活づくりのための学級活動
 - ② 児童の創意による児童会活動（委員会活動、ペア活動、運動会）
 - ③ 年少者への思いやりの心を育てる幼小交流
 - ④ 人とかかわりを意識したクラブ活動
- (4) 保護者や地域と協同して
 - ① 保護者や地域への発信と啓発
 - ② 保護者や地域とかかわりによる人権意識の育成

3. 特色ある実践事例の内容

- (1) 学習指導部
 - ① 学ぶ楽しさを実感し、確かな学力をつける授業
 - 手立て1) 単元構想・授業構想の工夫、見通しや振り返りの方法の工夫
 - 手立て2) 授業の視覚化・焦点化・共有化の工夫
 - 手立て3) 個に確かな学力をつけるためのかかわり合いの工夫
 - 手立て4) 少人数指導の有効な活用
- ア 手立て1：単元構想・授業構想の工夫、見通しや振り返りの工夫
 - (ア) 6年国語「川とノリオ」では「ビブリオバトルで物語の楽しさを紹介しよう」という単元を組み、単元の終わりにどんな学習を行うのか、そのためにこの教材でどんな学習をしたらよいのかの見通しをもって学習をスタートした。そうすることで、子供たちはこれから何を学習するのかがわかり、意欲的に取り組む姿が見られた。また、教科書の教材を学習しながら、「この物語のよさはここだ。私の読んでいる本では、どうだろう。」と自分の選んだ本に振り返って考える場面も見られた。単元の終わりには一人一人が自信をもって本を紹介し、「それまでの学習を生かして、本を紹介することができた」という充実感が感じられた。
- イ 手立て3：個に確かな学力をつけるためのかかわり合いの工夫
 - (ア) 2年算数「長さ」では、子供がミニ先生となり、友達にものさしを使った測り方を教えるというかかわり合いを設定した。友達同士で確認することで、教わるがわができるようになるだけでなく、教えるがわも言葉に出して説明することにより理解を深めることができた。
 - (イ) 6年外国語活動「おすすめの国を紹介しよう」では、自分の調べた国のよさを他の班に英語で伝えるという学習を行った。グループの代表として他の班に伝える場を設定したことで、班の友達と考えを出し合ってよりよい言い方を工夫したり、他の班の説明を真剣に聞いたりする姿が見られた。
 - (ウ) 5年国語の学習では、自分の立場をはっきりさせて話し合いをさせるために、ホワイトボードを活用している。ホワイトボードを用いて共通点を確認し

合ったり相違点を話し合ったりして、お互いの意見をじっくりと聞きあう姿が見られた。

② 総合的な学習の時間での取組

ア 4年「ユニバーサルデザインを考えよう」では、校長がゲストティーチャーとして参加した。子供たちが、ユニバーサルデザインとは何かを知ったり、自分たちでユニバーサルデザインを考えたりする活動を行った。その作品をコンクールに応募したことで、自分たちにもできることがあるという意欲をもった。

イ 4年「花いっぱいになろう」の取組では、花の苗を配布するためにデイサービスの施設や保育園などに積極的に向かい、そこで出会った人々と交流することができた。花を大事に育ててくれる方が多く、花の成長日記やお礼の手紙が子供たちのところに届いた。地域の皆さんに喜んでもらった経験から、子供たちは、自分の活動に自信をもつことができた。

(2) 生徒指導部

① 自己肯定感・自己有用感・自己存在感の形成

子供の自尊感情を育てるために、互いのよさを認め合う「かがやき見つけ」を全学年で行った。学年に応じて、「かがやきの木」「かがやき一番星」「かがやきの絆をつなげよう」などと子供たちにわかりやすい投げかけをし、よいところを伝え合うことで自己肯定感や自己存在感を高めるようにした。

さらに、よいところをカードに書いて掲示するだけでなく、それをどう生かすかを工夫した。2年生は、前期の「かがやき一番星」を更に広げて、次の「かがやき見つけ」に高めた。6年生は、ただよいところを見つけるだけでなく、みんなのかがやきの絆をつなげようと投げかけ、互いに書いた「かがやき」に注目できるようにした。

② 特別支援学級（ひまわり学級）とのかかわりによる人権感覚の育成

ひまわり学級と各学年児童との交流を積極的に進めた。ひまわり学級の生活単元学習「ひまわりランドへようこそ」では、通常学級の児童をお客さんとして招待し、みんなに楽しんでもらう活動を工夫した。また、教科学習を始め校外学習や体験学習においても交流学級とともに活動をすることで、それぞれの個性を尊重しながら、その子なりのがんばりを認め合う気持ちをもてるようになってきた。

(3) 特別活動指導部

① 児童の創意による児童会活動

楽しい生活委員会では、各クラスのいいところを画用紙に書き出したものを掲示する「クラスの自慢を見つけようキャンペーン」、全校の友達や先生たちに呼びかけ、「ありがとう」の気持ちを手紙に書いてもらい、それを届ける「ありがとうの手紙を届けようキャンペーン」、笑顔の写真を掲示した「笑顔見つけ隊」の活動を進めた。校内に優しさあふれる掲示が増え、温かい雰囲気が広がった。

② ペア活動の見直しと工夫

ペア読書では上級生が下級生に読み聞かせるだけではなく、下級生が上級生に読み聞かせる時間をつくった。また、運動会の徒競走では、ペアで応援し合えるようにコースのすぐ近くに応援場所を設定したりした。卒業を控えた6年生に感謝の気持ちをこめて、全校縦割りで「6年生とランチ会」や「6年生と遊ぶ会」を5年生が計画立案し、実施した。低学年では、近くの幼稚園に児童が出向き、園児のできそうな遊びを考えて交流会を行った。ペア活動が充実し、異学年との交流が深まったことで年下への思いやりの気持ちや、年上へのあこがれの気持ちが育まれた。

(4) 保護者や地域と協同した取組

① 保護者・地域への発信と啓発

学校だよりを通して人権教育にかかわる活動の様子を継続的にお知らせしたり、校長だよりを通して子供たちのよいあrawれを子供にも保護者にも伝えたりした。

また、人権だより「ぽかぽか」を発行し、「ありがとうチャレンジ」「一日一回ぎゅっとしよう」「一緒にやってみよう」「子供のよいところを見つけよう」など家庭でできる人権的な活動を提案し、保護者が子供に積極的にかかわる家庭教育の充実を図った。さらに、活動に取り組んだ保護者からの感想を校内に掲示したり、次の人権だよりで紹介したりして、取組を広げていった。

② 保護者や地域とのかかわりによる人権意識の育成

本校では、PTA主催による通学合宿「仲良し学校」が30年以上続いており、自治会館やお寺等に120名ほどの児童がPTA役員や保護者ボランティアと合宿をした。一般のお宅のお風呂を借りる“もらい湯”が伝統となっており、2泊3日の共同生活を通して、地域の方とのつながりを深めた。

また、地域のお祭り「街道カーニバル」では、地元商工会の方の支援を受けながら、5年生児童が実際に出店し、販売する活動も行った。商売の仕組みや接客等、学校生活では体験できないことを地域の方から学ぶと同時に、子供と地域の方との交流の場となった。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(1) アンケート結果の活用

様々な手立てを講じたことにより、H27年9月のアンケートでは、全校で82%もの子供が「自分にはよいところがある」と答えている。しかし、残り20%弱の子供は、自分に自信がなかったり、自分のよさを表出することにためらいを感じたりしており、なかなか自尊感情の高まりにまでつながらない子がいることもわかった。

そこで、アンケート結果を有効に活用したいと考え、アンケートから気になる表れが見られた子に関して、担任がその子の気持ちに添いながら、個別にかかわることを心がけた。

5. 実践事例の実績、実施による効果

(1) 子供の変容について

次の表は、静岡県「『有徳の人』づくりアクションプラン」での「児童生徒アンケート集計」による県5年生児童平均値（H26年12月）と、本校5年生児童の平均値との比較である。この2年間、様々な手立てを通して人権教育に力を入れてきたことが、次の調査項目の結果に表れてきていると考えられる。5年生児童に限らず全校児童についても、職員にとって手応えとして感じられる部分を以下に記す。

『有徳の人』づくりアクションプラン・児童生徒アンケート結果（5年生）

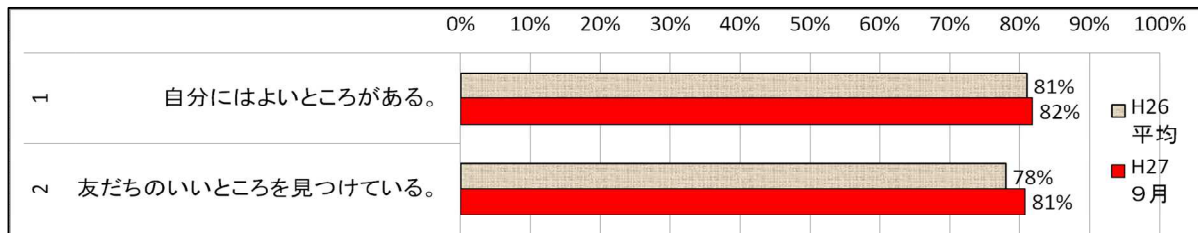
	H26 県5年生平均	本校5年生平均		
		H25 2月	H26 2月	H27 9月
学校が楽しい	89.1	86.1	97.2	97.2
授業の内容がよくわかる	89.9	84.7	95.8	97.2
自分の将来に対する、はっきりとした夢や希望をもっている	81.3	75.0	81.7	85.9

- ① 授業の中では、「学ぶ楽しさを実感できる」ように、単元構想を工夫し、考えをゆさぶるような資料を提示したり、考えたくなるような課題を提示したりしたことで、子供たちが自分なりの目当てをもって主体的に学習に臨むようになった。友達の話や話を聞こうと身を乗り出してうなずく子や、話を聞いてもらおうと黒板を指し示しながら話す子の姿が見られるようになったのは、授業に対する意欲の表れであると考えられる。また、単元の始めに、1時間ごとで身に付けたいことを見通し、終わりにそれができているかを振り返ることも大切にしてきた。

これらの取組を継続したことで、「授業の内容がよくわかる」と答える子が、昨年度の前期アンケートでは学校全体で72%であったが後期には92%へと増加した。本年度の前期は84%であったので、今後も手立てを工夫し、子供たちが「授業の内容を理解して学習を進めることができている」と感じることができるよう授業を行っていきたい。

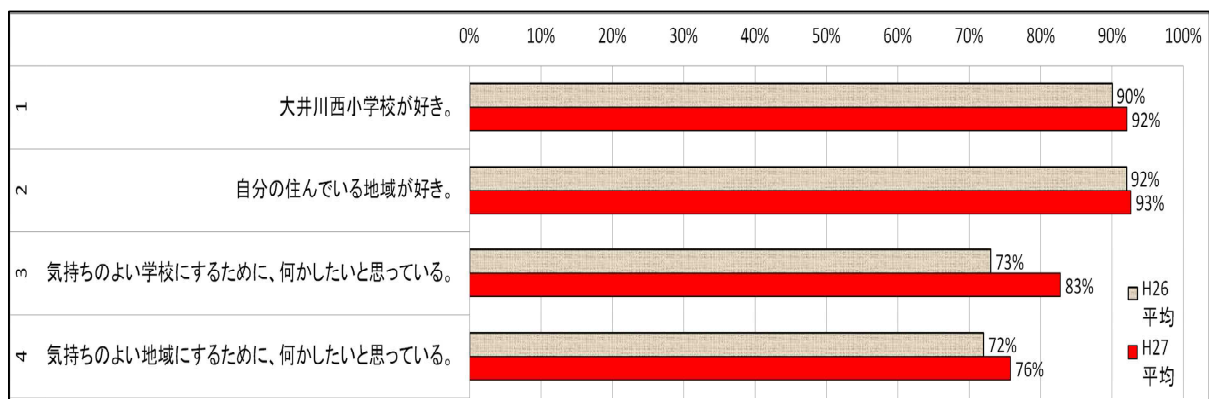
- ② かがやき見つけの活動を充実させたり、ペア活動に工夫を加えたりするなど、自尊感情を高める様々な取組を進めたことで、子供が自分自身のよさを実感する場が増えたとともに、友達のよいところに目を向けてそれを認めることのできる子も増えた。それにより、どの学年においても、学級の温かな雰囲気が醸成されている。（学校評価アンケート①参照）

学校評価アンケート結果①（全校平均）



③ 授業や行事において、地域の方とかかわりながら学ぶ活動を多様に取り入れたことで、自分たちの学校・地域であるという意識が高まり、学校や地域のために自分から働きかけたいと考える子が増えた。（学校評価アンケート②参照）

学校評価アンケート結果②（全校平均）



(2) アンケート結果を生かした対応と個の変容について

自分の活躍の場が見いだせず、「自分にはよいところがない」と感じていたA児に対して、担任は、A児の好きな音楽の授業で活躍できる場を意図的につくり、みんなからそのよさを認められるように工夫した。また、「自分が好きではない」と言っていたB児に対して、担任は、学級活動で「よいところ見つけ」を設定したことで、B児は、多くの友達から「Bさんのよいところはここだね」「こんなところもいいね」と認められた。

担任が意図的に、その子が生かされる場を設定するとともに、その子の言動を積極的に価値づけたことで、自尊感情が低かった子供も、「友達にほめてもらえてうれしかった」「ぼくにもいいところがあった」「自分らしくしていればいいんだ」と“まんざらではない自分”に気づいてきた。

(3) 職員の意識化について

どの子にもわかりやすい授業になるように教材を工夫して授業を行ったり、ペア活動や委員会活動で子供の創意を生かしたりと、人権の視点で少しでもできる工夫をしようという意識が高まった。

また、アンケート結果から自己肯定感や自己有用感が低い児童に焦点を当て、その子に対して、その子にあった支援をすることが必要だという意識が高まった。職員アンケートには、次のような職員の言葉が見られた。

【職員アンケート「人権尊重の学校づくりに取り組んできて、どのようなことを感

じていますか。」】

- ・ 今がよければいいのではなく、その子の将来を見据えて接していかなければいけないことがあることを今一度考えてみたい。
- ・ 個々の子供に対して自分が発する言葉に注意し、それがその子をどんな気持ちにさせるのかを考えるようにしている。
- ・ 授業では、困っていることを中心に話し合い活動や追究活動を取り入れるようにした。わからないことをみんなで考えていこうという雰囲気作りをしたことで、子供から自然に「どうして？」や「だってね」といった言葉が出てくるようになり、ねらいにせまることができるようになった。
- ・ 前に出る子ばかりが認められることが多かったので、自信のもてない子を教師が意識してその子のがんばりを認めるようにしてきた。そうすることで、子供たち同士の認め合いやかがやき見つけが増えた。
- ・ 自分自身の人権感覚に対して、以前よりも厳しく自己評価するようになった。その上で、まだ足りないところに気づいたので、今後も温かい言葉のシャワーを意識がけ、温かい学級づくりに一層力を入れたいと思う。

6. 実践事例についての評価

(1) 保護者への浸透

学校が行っている人権教育を保護者にも積極的に発信したり啓発を図ったりしたことで、目指す子供像を保護者と共有でき、保護者が子供の成長を実感する場が増えてきた。また、保護者自身が自分の子育てを振り返り、子供とのよりよいかかわり方を考える機会ともなった。

【保護者アンケート「学校ではこれまで、人権教育を意識した取組を進めてきました。お子さんは、どのようなところが育ってきたと感じますか。」】

- ・ 特に友達に対して、思いやりの気持ちがでてきた。
- ・ 今までは、人に言われたからやる、人に誘われたから行く、など受け身がちであった。最近では、自分から積極的にやるようになった。
- ・ 一緒に遊ぶ友達が増え、友達と遊ぶ約束をよくしてくるようになった。
- ・ クラスのリーダーとなり、みんなのためにがんばってこられた。
- ・ 自分から何かをしようとする気持ちが育ってきた。
- ・ 自分の欠点を理解し、それを乗り越えようとしている姿が見られる。

【保護者アンケート「保護者御自身について、これまでと変わってきたことがありますか。」】

- ・ 今まで何げなく行っていたことでも、行った方がよさそうなことは意識的に生活に取り入れ、子供と接する機会を増やしていきたい。
- ・ 「ぽかぽか」（人権便り）で、当たり前なのに忘れがちだったことを思い出すことができた。子供とのかかわりを振り返るよいきっかけとなった。
- ・ 今までは手を貸しすぎたが、子供が自分からやるのを待つようになった。
- ・ 子供も一人の人間だと気づき、口を出さずに自分で考えるまで待つようになった。

(2) 静岡県移動教育委員会が本校で開催され、保護者や地域住民を交えて本校での人権教育の取組を紹介した。その際に、「学校・家庭・地域が三位一体であることを感じた」という評価を頂いた。今後も「今ある教育活動にちょっとした工夫をプラス」しながら、自己肯定感の向上とともに多様性を尊重することのできる子供の育成を目指していきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

焼津市立大井川西小学校

本校では、「人権教育」をキーワードにこれまでの教育活動を見直し、工夫を加えることにより人権教育を推進しようとしている。学習指導部、生徒指導部及び特別活動指導部の3つの部門が策定した校内目標を達成する取組と、保護者や地域と連携した校外での取組を並行して実施することにより、幅広い知識を身に付け、経験させることを目指している。

中でも、特別活動指導部が児童会活動として行った、「クラスの自慢を見つけようキャンペーン」、「ありがとうの手紙を届けようキャンペーン」、笑顔の写真を集めて校内に掲示する「笑顔見つけ隊」の活動、そして、上級生と下級生の交流をより深化させるよう見直しと工夫を加えた「ペア活動」は、円滑な人間関係の構築に結びつくものとなっている。

さらに、「学校だより」、「校長だより」及び「人権だより」の発行やPTA主催の伝統的な行事「通学合宿」などは、学校と地域をつなぐ活動の在り方の一例を示している。